

続西方の人

芥川龍之介

青空文庫

1 再びこの人を見よ

クリストは「万人の鏡」である。「万人の鏡」と云ふ意味は万人のクリストに倣ならへと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に万人の彼等自身を発見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締め切日の迫つた為にペンを抛なげうたなければならなかつた。今は多少の閑ひまのある為にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに——こと殊にクリストを描いたものなどに興味を感じずるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼び

かけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない。

2 彼の伝記作者

ヨハネはクリストの伝記作者中、最も彼自身に媚こびてゐるものである。野蛮な美しさにかがやいたマタイやマコに比べれば、——いや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさへ、近代に生まれた我々には人工の甘露味を味はさずには措おかない。しかしヨハネもクリストの一生の意味の多い事実を伝へてゐる。我々は、ヨハネのクリストの伝記に或苛いらだ立たしさを感じるであら

う。けれども三人の伝記作者たちに或魅力も感じられるであらう。人生に失敗したクリストは独特の色彩を加へない限り、容易に「神の子」となることは出来ない。ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も当代には、*up to date* の手段をとつてゐる。ヨハネの伝へたクリストはマコやマタイの伝へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、莊嚴にも優しいことは確かである。クリストの一生を伝へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼の伝記作者中、最もクリストを知つてゐたであらう。マコの伝へたクリストは現実主義的に生き生きしてゐる。我々はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、——更に多少の誇張さへすれば、クリストの鬚の匂を感じるであらう。しかし莊嚴にも^{いたは}劬り

の深いヨハネのクリストも斥けるしりぞことは出来ない。兎とに角かく彼等の
伝へたクリストに比べれば、後代の伝へたクリストは、——殊に
彼をデカダンとした或ロシア人のクリストは徒らに彼を傷きずけるだ
けである。クリストは一時代の社会的約束を蹂躪じゅうりんすることを顧
みなかつた。(売笑婦や税みつぎとり吏らういや癩病人はいつも彼の話し相手
である。)しかし天国を見なかつたのではない。クリストを Tent
შიに描いた画家たちはおのづからかう云ふクリストに憐みに近
いものを感じてゐたであらう。(それは母胎を離れた後、「唯我
独尊」の獅子吼ししうをした仏陀よりもはるかに手たよりのないものであ
る。)けれども幼児だつたクリストに対する彼等の憐みは多少に
もしろ、デカダンだつたクリストに対する彼の同情よりも勝つて

る。クリストは如何に葡萄酒に酔つても、何か彼自身の中にあるものは天国を見せずには措おかなかつた。彼の悲劇はその為に、——単にその為に起つてゐる。或ロシア人は或時のクリストの如何かに神に近かつたかを知つてゐない。が、四人の伝記作者たちはいづれもこの事實に注目してゐた。

3 共産主義者

クリストはあらゆるクリストたちのやうに共産主義的精神を持つてゐる。若し共産主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉ことごとく共産主義的の宣言に変わるであらう。彼に先立つたヨハネさ

へ「二つの衣服うはぎを持てる者は持たぬ者に分け与へよ」と叫んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。我々人間は彼の前におのづから本体あらはを露してゐる。(尤も彼は我々人間を操縦することは出来なかつた、——或は我々人間に操縦されることは出来なかつた。それは彼のヨセフではない、聖靈の子供だつた所以ゆゑんである。)しかしクリストの中にあつた共産主義者を論ずることはスヰツルに遠い日本では少くとも不便を伴つてゐる。少くともクリスト教徒たちの為に。

4 無抵抗主義者

クリストは又無抵抗主義者だつた。それは彼の同志さへ信用しなかつた為である。近代では丁度トルストイの他人の眞実を疑つたやうに。——しかしクリストの無抵抗主義は何か更に柔かである。静かに眠つてゐる雪のやうに冷かではあつても柔かである。

……

5 生活者

クリストは最速度の生活者である。仏陀は成道じやうどうする為に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗礼を受けると、四十日の断食の後、忽ち古代のジヤアナリストになつた。彼はみ

づから燃え尽きようとする一本の蠟燭ろうそくにそつくりである。彼の所業やジャアナリズムは即ちこの蠟燭の蠟淚ろうるみだつた。

6 ジャアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジャアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼は大きい無花果いちじゆくのかげに年とつた予言者になつてゐたであらう。平和はその時にはクリストの上にも下つて来たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を与へてくれ

なかつた。それは受難の名を与へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の為に永久に若々しい顔をしてゐるのである。

7 クリストの財布

かう云ふクリストの収入は恐らくは ज्याアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。ボヘミアン？——我々はここにもクリストの中 of 共産主義者を見ることは困難ではない。しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまま、明日のことを顧みなかつた。「ヨブ記」

を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だったかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこまず手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の収入を扶たすけたことであらう。彼のジヤアナリズムは十字架にかかる前に正に最高の市価を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、——現にアメリカ聖書会社は神聖にも年々に利益を占めてゐる。……

8 或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の伝記作者の一人、——ルカの語る所によれば、「其子イエルサレムに

留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後みや殿にて遇あふ。彼教師の中に坐し、聴かつき且問ひゐたり。聞きくもの者其知慧さときと其応対こたへとを奇あやしとせり。「それは論理学を学ばずに論理に長じた学生時代のスウィフトと同じことである。かう云ふ早熟の天才の例は勿論世界中に稀まれではない。クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言つた。すると彼は存外平氣に「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。「されど両親は其語れる事ことを曉さとらず」と云ふのも恐らくは事實に近かつたであらう。けれども我々を動かすのは「其母これらの凡すべての事を心に蔵とめぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖靈の子供であることを承知

してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の為にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に——或は人氣のない夜中に突然彼女を驚かした聖霊の姿も思ひ出したかも知れない。「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベルの気もちは幼いクリストの中にも漲みなぎつてゐる。しかし大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。

9 クリストの確信

クリストは彼の ज्याアナリズムのいつか大勢の読者の為に持て
囃はやされることを確信してゐた。彼の ज्याアナリズムに威力のあつ
たのはかう云ふ確信のあつた為である。従つて彼は又最期さいごの審判
の、——即ち彼の ज्याアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。
尤もつともかう云ふ確信も時々は動かずにもなかつたであらう。しかし
大体はこの確信のもとに自由に彼の ज्याアナリズムを公けにした。
「一人の外に善よきもの者はなし、即ち神なり」——それは彼の心の中
を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリストは彼自身も
「善き者」でないことを知りながら、詩的正義の為に戦ひつづけ
た。この確信は事実となつたものの、勿論彼の虚栄心である。ク
リストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未来を夢みてゐ

た超阿呆の一人だつた。若し超人と云ふ言葉に対して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば。……

10 ヨハネの言葉

「世の罪を負ふ神の仔羊を觀^みよ。我に後^{おく}れ来らん者は我よりも優^{まさ}れる者なり。」——バプテスマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにもた人々にかう話したと伝へられてゐる。壁の上にストリントベリーの肖像を掲げ、「ここにわたしよりも優れたものがあ^る」と言つた、^{たくま}逞しいイブセンの心もち^はヨハネの心もちに近かつたであらう。そこに茨^{いばら}に近い嫉妬よりも寧^{むし}ろ薔薇^{ばら}の花に似た理

解の美しきを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストの位の位天才的だつたかは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの蘆のゆららかに星を撫でてゐるやうに。……

二 或時のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗つてやつた。「ソロモンよりも大いなるもの」を以てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜けんそんを示したのは我々を動かさずには措おかないのである。それは彼の弟子たちに教訓を与へる為ではない。

彼も彼等と変らない「人の子」だつたことを感じた為におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「神の仔羊を觀よ」と言つたのよりも莊嚴である。平和に至る道は何びともクリストよりもマリアに学ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（カトリック教はクリストに達する為にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも偶然ではない。直ちただにクリストに達しようとするのは人生ではいつも危険である。）或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂いはゆるニウス・ヴァリユウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解し

なかつた。

「お前たちはもう綺麗きれいになつた。」

それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望（或は彼の虚栄心）の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事実上逆説的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

二 最大の矛盾

クリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも関わらず彼自身を理解出来なかつたことである。彼は庭鳥にはどりの啼な

く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我々人間の弱いかと云ふことを教へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト教を理解することはこの為に一々彼の所業を「予言者X・Y・Zの言葉にかな応はせん為なり」と云ふきへん詭弁を用ひなければならなかつた。のみならずつひ畢にかう云ふ詭弁の古い貨幣になつた後はあらゆる哲学や自然科学の力を借りなければならなかつた。クリスト教はひつきやう畢 竟クリストの作つた教訓主義的な文芸に過ぎない。若し彼の（クリストの）ロマン主義的な色彩を除けば、トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文芸であらう。

13 クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「わたしは誰か？」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼は ज्याアナリストであると共に ज्याアナリズムの中の人物——或は「譬^ひ喩^ゆ」と呼ばれてゐる短篇小説の作者だつたと共に、「新約全書」と呼ばれてゐる小説的伝記の主人公だつたのである。我々は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事実を発見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だつた。

14 孤身

「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隠れ得ざりき。」——かう云ふマコの言葉は又他の伝記作者の言葉である。クリストは度たび隠れようとした。が、彼の ज्याアナリズムや奇蹟は彼に人々を集まらせてゐた。彼の イエルサレムへ赴いたのもペテロの彼を「メシア」と呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は橄欖かんらんの林だの岩の山などを愛したであらう。しかも ज्याアナリズムや奇蹟を行つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我々のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。けれども ज्याアナリストとなつた後、彼の孤身

を愛したのは疑ひのない事実である。トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人々は沢山ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか？」と言つた。この名声の高まると共に自ら安じない心もちは我々にも決してない訣わけではない。クリストは名高いジャアナリストになつた。しかし時々大工の子だつた昔を懐がつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをファウスト自身に語らせてゐる。ファウストの第二部の第一幕は実にこの吐息の作つたものと言つても善よい。が、ファウストは幸ひにも艸くさば花なの咲いた山の上に佇たんでゐた。……

15 クリストの歎声

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」と言つた。この歎声も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリックに時々かう叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我々はそれ等の寺院にやはり彼の歎声を感じずであらう。

「どうしてお前たちはわからないか？」——それはクリストひとりの歎声ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歎声である。

16 サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅である。この事実を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだった。彼等は今後も地衣類ちいるみのやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に当嵌あてはまる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油断のない処世術を講じてゐる。マリアは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。ゲエテをベエトホオヴェンの罵ののしつたのは正にゲエテ自身の中にあるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだ

つた。

二 カヤパ

祭司の長をさだつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必しもこの憎しみは彼一人にあつた訣わけではない。唯彼を推し立てることのクリストを憎み或は妬ねたんだ大勢の人々に便利だつたからである。カヤパはきららに袍ほうを着下きくだし、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意気地のない聖霊の子供を嘲あざけつてゐる。燃えさかる松たいまつ明の光りの中に。……

18 二人の盗人たち

クリストの死の不評判だったことは彼の十字架にかかる時にも盗人たちと一しよだったのに明らかである。盗人たちの一人はクリストを罵ることを憚はばからなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の為に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかしもう一人の盗人は彼よりも更に妄まうさう想を持つてゐた。クリストはこの盗人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盗人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。

「お前はお前の信仰の為に必ず天国にはひるであらう。」

後代はこの盗人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盗人には、——クリストを罵つた盗人には輕蔑を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、——サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に賛成してゐる。事実上天国にはひることは彼等には無花果いちじゆくや真桑瓜まくはうりの汁を啜すするほど重大ではない。

19 兵卒たち

兵卒たちは十字架の下にクリストの衣ころもを分わかち合つた。彼等には彼の衣の外に彼の持つてゐたものは見えなかつたのである。彼等

は定めし肩幅の広い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリストは定めし彼等を見おろし、彼等の所業を輕蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我々人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

20 受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚栄心を持つてゐたものの、彼の肉体的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐたマリアを眺めることは苦しかつた訣わけである。

が、彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の声を挙げた後も（たとひそれは彼の愛する讚美歌の一節だつたにもせよ）彼の息の絶える前には何かおほ声を発してゐた。我々はこのおほ声の中に或は唯死に迫つた力を感じざるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、「みや殿の幔まくらへ上より下まで裂けて二つになり、又地震ふるひて岩裂け、墓はらひらけて既に寝いねたる聖徒の身多く甦よみがへ」つた。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふシヨツクを与へたであらう。（マリアの脳貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威厳を尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の註釈を与へてゐるパピニさへこの事實はマタイを引いてゐるのに過ぎない。彼自身を欺あざむいてゐるパピニの詩的情熱はそこにも亦馬脚

を露^{あらは}してゐる。クリストの死は事実上彼の予言者的天才を妄信した人々には——彼自身の中にエリヤを見た人々には余りに我々に近いものだった。従つて又炎の車に乗つて天上に去るよりも恐しかった。彼等は唯その為にシヨツクを受けずにはゐなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのシヨツクに欺かれはしなかつたであらう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウヨウクや東京へも伝はつてゐる。イエルサレムを囲んだ橄欖^{かんらん}の山々を最も散文的に飛び超えながら。

21 文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の余りに文化人だつた為である。(彼の天才を別にしても。) 彼等は大体は少くとも彼に奇蹟を求めてゐた。哲学の盛んだつた摩伽陀国まかだこくの王子はクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧ろユダヤの罪である。彼は口オマの詩人たちにも遜ゆづらない第一流のジャアナリストだつた。同時に又彼の愛国的精神さへ抛なげうつて顧みない文化人だつた。(マコはクリスト伝第七章二五以下にこの事実を記してゐる。) バプテズマのヨハネは彼の前には駱駝らくだの毛けごも衣いなごや蝗いなごや野蜜いなかに野人の面目あらはを露あらはしてゐる。クリストはヨハネ

の言つたやうに洗礼に唯聖靈を用ひてゐた。のみならず彼の洗礼（？）を受けたのは十二人の弟子たちの外にも売笑婦やみつきとり税吏や罪人だつた。我々はかう云ふ事實にもおのづから彼に柔い心臓のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた奇蹟の中に度たび細かい神経を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蛮な死を遂げるやうになつた。しかし野蛮なバプテズマのヨハネは文化的なサロメの為に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の為に逆説的な悪いたづら戯を忘れなかつた。……

22 貧しい人たちに

クリストの ज्याアナリズムは貧しい人たちや奴隷を慰めることになった。それは勿論天国などに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた為もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない。我々も彼の ज्याアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない。狭い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼の ज्याアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしい ज्याアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「予言者」は彼以後には流行し

てゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる為に、—— ज्याアナリズム至上主義を推し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。ゲエテは婉曲ゑんきよくにクリストに對する彼の輕蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。——我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

(昭和二年七月二十三日、遺稿)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：野口英司

1998年6月1日公開

2004年3月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

続西方の人

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>